

「サイパンで出会った人たち」

国際交流学科 1・2年『国際事情サイパン』受講生

発表者：伊東杏里菜・上金礼佳・山下昌志

指導教官：小代有希子教授

はじめに

2009年前期『国際事情』を受講した私たちは、8月23日から9日間、第二次世界大戦における激戦地であるサイパン島に滞在した。大抵の日本人が描くサイパンのイメージは、青い空と綺麗な海が広がる常夏のアイランドリゾートである。しかしそのイメージとは大きくかけ離れた現実がこの島にはあった。

サイパン島を含む北マリアナ諸島は、16世紀からスペインの、19世紀末からドイツの植民地だった。1914年に勃発した第一次世界大戦において日本がドイツを破ると、日本はサイパンを含む赤道以北の南洋諸島を占領した。太平洋戦争中は日本軍がこの島に司令部を置いたため、1944年6月にはアメリカ軍がサイパンに上陸し、日本人や、島の原住民であるチャモロ人やキャロリニアン人を巻き込んだ戦いとなり、3万人以上の戦争犠牲者を出して、島はアメリカ軍の手に落ちた。戦後、国連のアメリカ信託統治を受けた後、アメリカの自治領となり現在に至っている。

私たちはこの研修中、植民地統治と戦争の傷跡を訪ねると同時に、現地の様々な人々から、今と昔のサイパンの話しを聞く機会を得た。彼らは私たちを歓迎してくれ、自分たちの体験を感情豊かにていねいに話してくれた。

この発表では、マナムコ敬老センターのご老人たち、サイパン島の激戦を生き抜いた下田四郎氏との邂逅、そして戦禍を生き延びサイパン初の女性議員となったエスコさんの話しに焦点をあて、最後に北マリアナ・カレッジで出会った私たちと同年代の学生たちについて説明し、彼らから学んだ「サイパンの今と昔」について紹介していきたい。

マナムコ敬老センター

私たちは公立マナムコ敬老センターを訪問した。ここはデイ케어・センターで 島内のお年寄りが日中集まって、職人と一緒にゲームしたり唄を歌ったりして楽しんでいる。日本委任統治時代を経験しているチャモロ人やキャロリニアン人のお年寄り（一番若くても70歳半ば過ぎ）が多くいるということで、私たちは彼らが知っている「夕焼け小焼け」、「赤とんぼ」、「桃太郎さん」を練習して、彼らの前で披露したところ、お年寄りも一緒に歌ってくれた。中には昔のことを思い出したのか涙を流している方もいた。また私たちはお年寄りの方々の健康を祈願して千羽鶴を作っていた。千羽鶴の説明をしたら大変喜んでくれた。その後、私たちが持参した折り紙やお手玉、紙風船をつかって一緒に遊んだり、空手の試合の真似をしたりした。お年寄りの中には日本人の親戚がいる人もあり、日本が大好きと伝えてくれた。

2005年、天皇皇后両陛下が終戦60周年記念でサイパンを訪問した際、マナムコ敬老センターにも立ち寄った。そのときの写真や記念品がガラスケースに収められているが、その際「歓迎」の意味を込めて作った横断幕が、今でも誇らしげにセンターの講堂中央に飾られている。その横断幕を外すことに、お年寄りが猛反対するからだそう。彼らは日本統治時代、天皇陛下は神と教えられて、一生お目にかかることが無いと考えていたという。そういう「雲の上の存在」が自分たちの敬老センターに立ち寄ったことが、お年寄りにとって本当に名誉なことだったらし。それは、当時の徹底された「皇民化教育」の名残なわけだが、サイパンのお年寄りは「統治者」日本に対しても愛国心を持っていたような気がした。いや、持つことを強制されたので、年をとってもその気持ちが消えなかったのだろうか。私たちはその「歓迎」と書かれた横断幕をただ見つめるしかなかった。私たちの仲間の学生の一人はなぜか泣き出してしまった。

日本人は現地の方々を戦争に巻き込み、多くの犠牲者をだしてしまったのは紛れもない事実である。しかしマナムコ敬老センターのお年寄りの方々は笑顔で私たちを受け入れてくれ、一緒に遊んでふざけて、帰りには優しく抱きしめてくれた。とても心が温かく、素晴らしい人ばかりだった。

下田四郎氏

今回の研修では、サイパン戦を生き延びた旧日本兵・下田四郎氏と会って話しを聞く機会もあった。下田氏は戦時中、対戦車戦用の特殊な訓練を受けた者だけが所属できる戦車第九連隊という部隊に所属していた。元々下田氏は満州に配属されており、対ソ連国境周辺警備の任務を与えられていたが、対米戦の戦局が悪化すると、部隊ごとサイパンに配置されたのだ。そしてサイパン戦では米軍を相手に戦ったが、自分の戦車が破壊された後ジャングルに逃亡し、1年以上もそこに隠れて、戦後ついにアメリカに降伏した、という人物である。

下田氏は、事実上敗戦した日本について「私たちは戦争に負けたと思っていない」と語った。そして当時の日本軍について、「日本軍は、力があったが、武器、資源がなかった。もし日本軍が当時の米軍と同程度の武器と兵力があったならば勝敗はわからなかった」とも述べた。戦時中の日本はとにかく資源不足だったそう。もともと資源を求めて始めた戦争である。下田さんの話によると、サイパン戦中はあまりの資源のなさに、木製の電柱を塗料で黒く塗りつぶして戦車の砲撃部分に見立て、そして脇には藁で作った人形を日本兵に見立ててたたずませ、米軍を錯乱させようとしていたそうである。

当時の日本人は、敵軍の捕虜になることを恥とした。それで敵軍の捕虜になる前に自ら命を絶ってしまう兵が多かった。民間人の場合も同様で、米軍に見つかる前に、家族全員で輪をつくりその中央で手榴弾を爆発させ命をたつこともあったそう。アメリカでは、敵軍の捕虜になることは英雄と同様の扱いを受けるのだそう。つまり捕虜になるということは、敵軍の最前線にいて勇ましく戦っていた証だからだ。それ

とは対照的な日本人の思想のために、サイパン島での戦闘はすさまじい数の日本人死者数を出した。米軍の攻撃で死亡した日本人に加えて、サイパン島の北部にあるバンザイクリフとスーサイドクリフという断崖絶壁から「天皇万歳」と叫びながら飛び降りて「自決」する民間人が後を絶たなかったのだ。

そんな中下田氏は、米軍との決戦の最中自分の戦車が破壊され戦線を離脱した後、なおもジャングルにこもり抵抗を続けた。米軍から逃れた日本人は、サイパンのジャングルに多くある洞窟に身を潜めた。下田氏もその1人で、ジャングルの中であきらめて自害する家族を目のあたりにもしたそうだ。ジャングルの生活では、飢えをしのごためにカタツムリをゆでて食べたりしていたそうである。またサイパンには淡水の水源が非常に少ないので、飲み水を確保することが非常に難しかったらしく、飢えと喉の渇きが何よりつらかったそうだ。下田氏は、サイパン陥落から1年3ヵ月、日本降伏から4ヶ月以上たった1946年12月、仲間と共に米軍に投降した。米軍が占領するサイパンのあちこちにクリスマス・ソングが流れるのを耳にして、日本の降伏を実感したのがきっかけらしい。そしてサイパンの米軍収容所生活を経て、1947年日本に送還された。

日本で第2の人生を歩み始めた下田氏は、自分の仕事が軌道に乗ると、戦後もサイパンのビーチに「鉄くず」のように残るままの戦車を、日本に持ち帰る事を思い立った。北マリアナ政府（当時は国連信託統治領の行政府）、アメリカ政府、日本政府を相手にした交渉は難航し、サイパンと日本を50回以上行き来したそうだ。財産を投げうってまでの努力の結果、最終的には2機の戦車を掘り起こし、一機は靖国神社の遊就館に寄贈、もう一つは静岡県富士市にある「若獅子神社」に安置した。戦後65年が過ぎた今も下田氏は健在で、私たちの世代に戦争の悲惨さを伝えていくことが自分の使命だと語ってくれた。

Tun Goru Snack Bar のエスコスおばあちゃん

サイパンの伝統的チャモロ料理を楽しめる Tun Goru Snack Bar では、日本統治時代を知るエスコスおばあちゃんの話しを聞くことができた。

チャモロ人が継承してきたこの伝統料理は、スペイン、日本、アメリカの食文化と、東南アジア各地からサイパンに来る移民の食文化の影響を受けて成長してきた。良く使われる食材は、ココナッツ、赤唐辛子、醤油、お酢、玉ねぎ、レモン汁、砂糖などで、どの料理にも「甘さ、辛さ、酸っぱさ」があるのが特徴である。

私たちのために用意してくれた特別な「食べ放題」メニューは、レッド・ライスにマンゴーの漬物、きゅうりのサラダ、バーベキュー・チキンと、チキン・ケラグエン、そしてアイス・ティーなどの定番だった。アピギギというココナッツとタピオカをバナナの葉で包み焼いたデザートも試した。どれも日本人の口に合い美味しいものばかりだ。

食事が終わると、このレストランのオーナーであるエスコスおばあちゃんが日本統治時代の話をしてくれた。最初は英語と日本語を混ぜて喋っていたが、話しているう

ちにだんだん思い出してきたのか、ほとんど日本語でしゃべってくれた。エスコスおばあちゃんは80歳だがまだまだ元気だ。子供は女が10人、男が3人の13人、孫が30人、ひ孫も20人と大家族の長だ。「幼いとき、日本人の友達がたくさんいた。私は成績がよくて、日本の先生は私を信頼してかわいがってくれた」などと話してくれた。戦争が始まる頃 サイパン島にどんどん日本兵がやってくると、彼らは乱暴で、チャモロ人たちを馬鹿にしたそうだ。エスコスおばあちゃんは学校でそのことを批判したら、1人の日本人の先生から「チャモロ人のくせに生意気だ」と怒られたそうだ。

おばあちゃんが14歳の時に米軍が島に上陸した。1日中洞窟の中に隠れ夜に活動していたが、一番つらかったことは死ぬ恐怖より食べものがなかったことだそうだ。1週間近く何も食べることも水を飲むこともできなかったという。私たちが大丈夫だったのかと聞くと、「神様のおかげ。よくお祈りばかりしている。だから大丈夫」と語ってくれたが、それ以上深くは語ろうとはしなかった。「戦争のことはもういい。仕方ないのよ。もう昔の話。私は今のサイパンが大好き」というだけだった。きっと私たちには到底言いつくせないようなことを体験してきたのだろうと思った。

エスコスおばあちゃんは戦後、サイパン島で初めての女性議員となり、このレストランの経営者にもなった。現在はサイパンの学校を訪れて、子供たちに戦争体験を語り平和教育に打ち込んでいる。広島や長崎の原爆についても詳しく、「戦争は何もかも奪ってしまうから何も残らない。戦争をしても何も解決しない。平和が一番だし平和が好き」と強く語っていた。

日本統治時代や日本が起こした戦争で辛い思いをしてきたはずなのに、日本の悪口はこぼさなかった。それどころか日本の童謡「赤い靴」を日本語で歌ってくれ、そのあとチャモロ語の替え歌も歌ってくれた。学校の卒業式のときに歌った「蛍の光」が今でも大好きだそうだ。今でも、ようかんや、おせんべい、どら焼きが大好きで、日本から友達がサイパンを訪ねてきたり、おばあちゃん自身も日本に行ったりする。最後に『夕焼け小焼け』を一緒に歌って、手をふって私たちを送り出してくれた。私たちはいつまでもこの食堂にいたくて、なかなかバスに乗ることができなかった。

北マリアナ大学の学生たち

最後に、新世代のサイパンの若者との出会いについて紹介する。私たちは、サイパン唯一の公立大学である「北マリアナ大学（短大）」を訪問した。日本の大学に比べると校舎は小さかったが、キャンパス内には、学生がアルバイトをする場が豊富にある。履修相談や就職アドバイス、購買部店員など様々なことを学生自身が行っており、日本ではあまり見かけない光景だ。さらに私たちが案内された施設には、魚の養殖研究を行っている海洋資源研究所や、島に作れる作物の研究をする農業研究所があった。太平洋戦争をきっかけに破壊された島の生態系を取り戻そうとする情熱が大学にあることに感銘を受けた。

私たちは現地の学生たちと一緒に授業を受けることができた。講義の内容は北マリアナ諸島がアメリカ合衆国に統合されるという『連邦化』が、学生や教授に及ぼす影

響についてであった。北マリアナ大学には、様々な国から移住・留学してきた学生も少なくないので、彼らは、自分たちは続けてサイパンに滞在し大学に在籍できるのかどうか真剣に質問していた。学生を見る限り、非常に勉強熱心だが、一方でサイパンには、家庭の経済的事情で高校卒業後すぐ米軍に入隊する若者も少なくない。しかし彼らは除隊後は失業することがほとんどなので、大学側は、より良い奨学金制度を提供したり、先輩大学生自らが高校訪問をして、入隊より大学進学を勧める説明会を行ったりしているらしい。

就職課も訪れて、サイパン大学生の就職活動事情について聞いてみた。面接の際、女子学生ならスカートは必ず膝丈のものをはき、肌の露出や化粧のしすぎを控える、男子学生も、タンクトップなどの肌見せは禁止、シャツのボタンはきちんと締める、男女ともにボディー・ジュエリーやタトゥー、髪染めは厳禁、と指導しているそうだ。全世界様々なファッションがある中、大事な時にふさわしい服装マナーはどこでも同じようだ。ちなみにこの大学生の普通の服装も、私たちとあまり変わらなかった。

私たちは北マリアナ大学生と一緒にチャモロ料理を食べたり、マーマーというサイパン伝統のトロピカルフラワーの髪飾りの作り方を教えてもらったりした。大きくたくましい男子学生も一所懸命にマーマーを作る。それが島の文化だから誇りを持っている、と教えてくれた。不慣れな英語で話す私たちに、彼らは真剣に耳を傾けてくれ 休日の過ごし方、「恋バナ」などの話題にのってくれた。自作の歌のプレゼントもあった。日本のお土産やお菓子を渡すと大変喜んでくれたようで、私たちも嬉しくなった。それでもおじいさんやおばあさんに聞いた戦争の話などをしてくれる学生もいて、少し複雑でもあった。やはりここでも、去るときは辛かった。

終わりに

私たちがこの国際事情サイパン研修を通して一番痛感したことは、「日本人は歴史を知らなすぎる」という事である。私たちは植民地統治や戦争の惨状を本で勉強してからサイパンに渡ったが、それでも現地の戦跡を見て受けた衝撃は尋常でなかった。

チャモロ人やキャロリニアンといったサイパン現地の人々は、日本人の差別や戦争中の軍人の傍若無人な振る舞いを受けてもなお耐え抜いた。そして今私たちが、サイパンを訪れると、心に傷を残しながらも大歓迎してくれ、流暢な日本語で思い出を語ってくれた。戦争を知らない世代の大学生を含め、サイパン中どこに行っても本当にみんな私たちに親切にしてくれた。

私たちは9日間朝から晩まで、サイパン島内のジャングル、ビーチ、洞窟などあらゆる場所に残る植民地統治と戦跡の跡を歩き続けた。今もなお残る戦車や当時の武器の残骸、そして私たちが訪れるつい数週間前 ジャングルで見つかったという人骨の破片（おそらく戦火で亡くなった親子のもの）をも目の当たりにした。戦争の傷跡と共に、サイパン島は今もなお苦しんでいるのだ。「最近の若者は」という言葉に当てはまるであろう私たちの世代だが、今真実を見つめ、新しい日本人の「平和と共生」のメッセージをサイパンと日本と世界の人びとに伝えて行くべきだ、と実感した。



TunGoruSnackBar のエスコスおばあちゃん



サイパンのきれいな海



下田四朗氏



チャモロ料理



マナムコ敬老センターにて



平和祈念碑清掃を終えて



スーサイドクリフ



バンザイクリフ



マナムコ敬老センターで
日本の童謡を披露



北マリアナ大学で現地の学生と一緒に